

「令和元年度ふくしま『学びのスタンダード』推進事業」推進地域の取組

パイロット校名	いわき市立小川中学校、小川小学校
推進協力校名	いわき市立小玉小学校

「授業スタンダード」「家庭学習スタンダード」に基づく実践

小川中学校区では、「授業スタンダード」を活用して授業の工夫・改善を行い、より質の高い資質・能力を育む授業づくりに取り組んできた。また、「家庭学習スタンダード」をもとに「家庭学習の手引き」等を作成し、児童生徒がR-PDCAサイクルを実現できるよう支援してきた。本年度は、過去2年間における成果と課題をもとに、「教師のコーディネート力」と「単元構成を意識した授業実践」に焦点を当て、実践を進めた。

1 推進地域における「授業スタンダード」の活用について

(1) 小川小学校における授業実践

① 授業力向上のための手立ての設定

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業力向上のための核となる手立てについて、「授業スタンダード」から以下に示す6項目を設定し、授業者はその中から2～3項目を選択して授業に取り入れた。

「教材との出会い」「多様な言語活動」「計画・方向付け・見通し」「見取り・支援」
「ペアやグループ・学級全体での話し合い」「まとめ・振り返り」

② 授業研究の実施

ア 各学年担任は、国語科または算数科で研究授業を行った。ただし、国語科・算数科を担当していない教員は、自分の担当教科で1回の研究授業を行った。今年度は、合計9回10授業で実施し、そのうち5回は要請訪問を実施した。

イ 参観者は手立てごとに感想等を付箋紙に記入し、事後研究会で活用した(図1)。また、「授業スタンダード」チェックシートにもチェックしてもらい、授業の成果や課題を明らかにし、教師のコーディネート力向上に努めた。

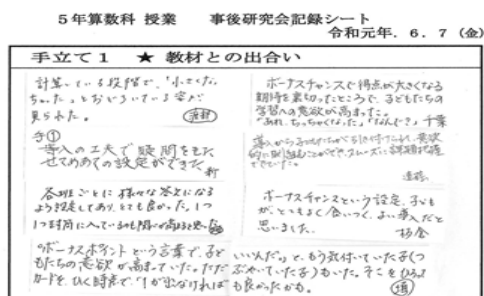


図1：事後研究会記録シート

(2) 小川中学校における授業実践

① 「授業スタンダード」の自校化

小川中学校では、「授業スタンダード」をもとに、授業で重点的に取り組む事項(33項目)をまとめた「小川中学校授業スタンダード項目」を作成している。具体的には、授業の学習過程に沿って以下の5項目を設定している。今年度は、特にA・Bを重点項目として研究を推進した。

- A 本時のめあてを明示し、動機付けを図る。
- B 本時の学習内容を振り返る時間を設定する。
- C 身につけさせたい力を明確にする。
- D 指導方法や指導資料を共有する。
- E 互見授業を推進する(随時)。

② 単元構成を意識した授業の作成

小川中学校では、単元の中で、習得と活用を意識した授業を展開できるよう、単元構成を工夫し、授業研究を実施した。要請訪問を国語科、数学科、社会科の3教科で実施し、校内研修を進めた(図2)。



図2: 「活用」型授業実践のようす

2 パイロット校の取組内容

(1) 小学校における「教科担任制」及び中学校における「タテ持ち」

① 小学校においては、国語科、算数科、理科、家庭科、音楽科、書写において教科担任制を実施した。また、5年生算数科では、TTを採用している(表1)。

教科担任制は、担当教科の教材研究に力を入れることができ、専門的知識や指導技術をより身につけて授業に臨むことができた。また、複数の教員が指導に関わることで、児童が多様な見方や考え方等に触れることができた。

推進教師	5学年担任	6学年担任	教務主任
5・6年国語	5・6年算数	5・6年音楽	3～5年理科
5・6年書写		5年算数TT	6年社会
5・6年家庭			

※ 小川小学校、各学年1学級

表1: 小川小学校における「教科担任制」実施例

② 中学校においては、国語科、数学科、理科、社会科でタテ持ちを実施した(表2)。

	国語		社会		数学		理科		
教師	A	B	C	D	E	F	G	H	教頭
1年	1組	2組	1・2組		1・2組		1組		2組
2年	1・2組			1・2組		1・2組		1・2組	
3年		1・2組	1組	2組	1組	2組	1・2組		

表2: 小川中学校における「タテ持ち」実施例 ※小川中学校 各学年2学級

「タテ持ち」の実施により、学年の枠を超え、学習内容の系統性や関連性をより強く意識することができ、共通理解・共通実践を図ることができた(図3)。また、教材観や指導観、単元目標が共有され、指導と評価の一体化を意識した指導改善が進められた。



図3: 共通実践の例(板書の構造化)

(2) 「家庭学習スタンダード」に基づく取組

① 授業と家庭学習における「学びの連続性」(小川小学校)

学習内容に応じて、家庭学習(復習、予習)を効果的に活用している。例えば、国語科では、登場人物の様子や行動、心情、情景など、観点ごとにサイドラインを引かせたり、新出漢字を使った熟語や同じ音訓をもつ漢字を調べさせ、授業でそれを用いた文章や問題文を作ったりしている。社会科では、用語の意味調べやグラフ・表を見て分かったことを、家庭学習でまとめさせている。

② 家庭学習への取り組み方の支援(小川中学校)

ア 「学習の手引き」の作成と活用

小・中で連携し、共通項目を設定した「学習の手引き」を作成している。これを進めるにあたって、教師は、休日と平日に分けて学習時間を設定するよう助言したり、授業で、基礎的な学習内容と活用型「調べ、考え、書く」の宿題を提示したりするなどの手だてを講じている。

イ 家庭学習における取組

「自己マネジメント力」育成のため、定期テスト（年4回）の学習計画表にチェック欄をつくり、生徒が自らの取組を客観的に振り返る機会を設けている。なお、チェック項目は、振り返る視点を明記し、4段階で自己評価している。

ウ 家庭との連携

家庭への啓発を図るため、定期テスト後に配付する成績個票の中に、保護者の評価欄を設け、家庭での学習の取組について、4段階評価で保護者に評価してもらうことで、保護者の意識を高めようとした。

3 推進協力校の取組内容

○ 「授業スタンダード」に基づく授業公開の実施

第2回推進地域協議会では、2学年算数科において、研究授業を実施した。その他にも一人一授業の研究授業を提供して校内研修会を実施し、学力向上と学習習慣の定着を図った。また、6月と12月に学習に関するアンケートを実施し変容を分析した。

4 3年間の取組から見た成果と課題

(1) 実践の成果

- ① 教職員の授業に対する意識の変容と授業改善が図られた。3年間実施の12項目のアンケートでは、10項目が向上又は高い水準を維持している。
- ② 「授業スタンダード」のリーフレットから授業改善の視点を整理し、それらをもとに授業実践に取り組んだ結果、「学びのスタンダード」のパイロット校として、教職員の共通理解をもとに授業等が実践された。
- ③ 新学習指導要領の趣旨を取り入れた授業改善の方向性を模索して取り組む教師が増加し、現在求められている授業改善の視点や方向性について理解が図られた。また、要請訪問での助言や校内研修の成果を共有し、日々の授業に生かしている教員が7割以上に及んだ。
- ④ 「教科担任制」や「タテ持ち」の導入により、学年担当間や教科担当間で活発な情報交換が行われ、指導技術の共有が図られた。
- ⑤ 宿題や定期テスト、小テスト等の出題内容の工夫・改善が図られた。
- ⑥ 生徒の自己評価や保護者アンケートを活用し、「自己マネジメント力」の向上を図る手立てを講じた。

(2) 実践の課題

- ① 繰り返し学習する場の設定や家庭学習の習慣化と充実による、学習内容の確実な定着に向けた支援の工夫が必要である。そのため、確実な「習得」を目指した繰り返し学習の実施や学習方法の指導（家庭学習及び授業における学習方法やノート指導）の工夫、効果的な宿題の出し方などについて、教員間で検討しなければならない。
- ② 指導技術向上や生徒の実態把握の工夫、研究の充実を図るための研修の機会の確保等を継続する。
- ③ 学習課題の設定を工夫するなど、家庭学習と授業を連動させた単元構成の構築が必要である。
- ④ 授業において、学習内容を確実に習得させ、単元末では既習事項をもとにして思考力・判断力・表現力等を活用できるよう、次年度も単元構想の構築とそれに関する授業研究を進めなければならない。
- ⑤ 自校の課題を客観的に把握し、課題解決の方向性を示すため、「全国学力・学習状況調査」や「ふくしま学力調査」等の各種調査結果を活用する必要がある。さらに、改善のための手立てを授業や家庭学習の中で実践していかなければならない。
- ⑥ 「タテ持ち」では、教材研究や教師間の情報共有のための時間をどのように確保するか。